

流刑地における秋月悌次郎——文人意識の目ざめ

中西 達 治

はじめに

会津若松城の開城後、猪苗代に謹慎していた秋月悌次郎は、長州藩士奥平謙輔からの手紙を受けて、藩命によりひそかに越後にいた謙輔を訪ね、会津の若者を預けるという話を纏めた。悌次郎は、十月七日に猪苗代を抜け出し、十一月三日に戻っている。この間十月十七日東京から、松平容保、喜徳と、重役萱野権兵衛、梶原兵馬、内藤助右衛門、手代木直右衛門、秋月悌次郎しめて五人を東京に連行せよとの命令が佐賀藩士徳久幸次郎を通じて届けられた。当初この命令は米沢藩に伝えられたが、米沢藩ではこの五人は米沢藩の預かり人数には入っていないとして断ったという。十九日に一同は上京の途についたが、この時秋月は越後に行っていたため同行できなかった。猪苗代では、秋月が脱走したと噂するものがあり、警固担当者が問題にしたが、会津藩側では、秋月が脱走することは断じてないと、取り繕ったという。『米沢藩戊辰文書』には、秋月の東京連行について、十一月に入ってから何度か官軍側でやりとりがあったことが記録されている。

十二月十二日、猪苗代に謹慎していた海老名郡治、井深茂右衛門、秋月悌次郎等九名、塩川に謹慎していた諏訪伊助、佐川官兵衛等四名は滝沢村の官軍陣営に召喚され、十三日小倉藩の兵士に護衛されて東京に向かって出発した。この時召喚された桃沢彦次郎は、病氣だった

ため、出発が延期され本復後出発、相馬直登は後に脱走して箱館軍に参加している。一行は、二十六日東京に到着し、直ちに伝馬町の獄に収監された。この時の旅の様子は、秋月が記録した『応懲日札』に詳しい。『応懲日札』については、二〇一三年「金城学院大学論集人文科学編」9-2「持続する志 二 秋月悌次郎の『応懲日札』参照」『会津戊辰戦史』は、一行の東京到着を、十六日としているが、秋月の記した道中記には、行程が細かに記されており、二十六日が正しい。

一

『応懲日札』以降の動静を、彼が高須から故郷の母と姉弟に宛てた手紙によって確かめておこう。(原文を引用する際には、原文を一部読み下しにしたり、送り仮名を振ったりした。ただし、「思え候」など、東北なまりをうかがわせる表記などは、原文のまま。)

「己巳(明治二年)十月二日夜認」とある高須からの第一信には、東京について以後揚り屋入りを命じられてから大名預けになるまでのいきさつが詳しく記されている。

十二月二十九日、彼等は刑法官に呼び出され大名預けを宣告される。秋月以下海老名郡治、井深茂右衛門、井深守之進、春日郡吾の五名は細川家預かり、外六人は、堀田家、土井家の両家に分けて預けられることとなった。

細川家では、表向きは厳しい取締をしていたが、内実は彼等に同情的で親切に取り扱われていた。六月十日になって刑法官が細川邸に至り、高須藩永預けが命じられ即日高須藩邸に引き取られた。この時彼を迎えに来た高須藩士は、河原丈平、文政九年（一八二六）生まれで四十四歳、悌次郎より二歳年下で、手代木直右衛門と同年齢である。安政六年には藩儒となり、日新堂教授、文武館教授を務め、この年高須藩公用人になっていた。この時、容保と同じく池田家預かりとなっていた手代木も、秋月と同じく高須松平家預けとなつて、高須藩邸に連れてこられた。

高須は、名古屋都心からおよそ三十キロメートル西に位置し、木曾川と揖斐川に囲まれた（この当時、長良川は木曾川に合流する支川だった。）美濃の輪中地帯にある。尾張徳川家の支流高須松平家の城下町である。高須松平家は江戸四谷に上屋敷があり、藩主はほとんど江戸で生活していたが、この当時藩主一族は国元に在留していた。時の藩主は松平半次郎義勇（第十三代）、第十代藩主松平義建の十男で、容保とは同母弟である。

秋月を引き取りに来た高須藩士河原丈平は、号を湊南と言い江戸で安積良斎に学んでおり、秋月と同門だったから気心の知れた人物で、秋月には何の気かりもなかった。高須藩邸では茶菓、酒などのもてなしを受け、衣類など生活必需品の供与を受け、旧会津藩関係者からの支度金も受け取っている。六月二十二日、江戸を出発し、七月五日高須に到着した。

二人を護送する二十三名の高須藩士卒の隊長は小山田紋左衛門、括齋と号し、菊池五山に詩の手ほどきを受けた人物である。彼らは、二人を余程恐ろしい人物だと思っていたのか、あるいはまた旧会津藩の浪人が襲撃して二人を解放するという風聞があったためか、はじめのうちは夜は寝ずの番で警戒してビクビクしているようだったのが、そ

のうちは警戒心がなくなつてツレ、のようになり、打ち明け話に興じ、酒を飲み詩を作りと、手代木と共に流刑地に赴く旅とは思えなかった。

二

七月五日（太陽暦、八月十二日）高須へ着く。飲食万端誠に
ご丁寧、毎日お菓子、御酒下され、風呂も日々相立て、即日若年
役の人見舞いとして参り、追っ付け善孝院様より（これは大殿様
の御産母に御座候）お使いにて茶道具と茶、並びにつば入りのお
菓子お贈り下され、誠に懇ろのご口上に御座候。また範次郎様
よりお使いにてご慰勞下され、結構のお菓子沢山拝領おせつけ
られ、また宮崎と申す（これは桑名様ご産母に御座候）奥女中酒
肴など贈られ、すべてご厚情の事共、誠に有り難き仕合わせに御
座候。

ついて私共居所はお国元相応土中屋敷に御座候。座敷両者へ、
両人差し置かれ、六畳に八畳の間、南北と分れ、南の庭にはみかん、
だいだいの類六、七本植え立て、北の庭には菊を移し植え、
今は菊の花盛り、みかんの色付く最中にて、さてさて見事なる事
に御座候。菊柑等何れも藩中の人進物、または在の物など聞き及
びみかんなど進物に呉れ、御筆を頂戴仕つり度など申す様なる事
に御座候ほか、畑類は野菜作り置き候事に御座候。南の部屋に私、
北の部屋に手代木殿居られ候事也。附き添えの人は玄閑足輕一人、
夫婦者二人、これは飲食衣服、給仕買物等致し、外に御中間と
唱え候もの日々三人にて交代、小使、水汲み、畑作等致し、また
お賄頭やうのものその下役やうの者日々見廻り、大約用事を承り
候。時には若年寄荒川官三（この人はこの藩の人物に御座候）、
また公用人達、夜分時々参り呉れ御酒給べる事にて、藩中へおい
おい知り人も出来、酒、肴、茸など方々より贈られ、詩歌の贈答
など致し面白き事に御座候。昨年暮、揚り屋に居り候事思ひ見え

ば、おそろしき鬼の側を去りてやさしき母の手につくようなる心地に御座候。範次郎様、善孝院様より度々お肴等下され有り難き事に御座候。かたがたご家中を始め町在まで義士だの忠臣だの感心だのとて、詩を作り呉れの、書を認めてくれのと打ち続き頼まれ、不孝の浦島次郎ひよつとは忠臣孝子かと思ひ候程の事、実はおかしくもあり笑止敷も在り、昨年暮の難洪が今日の楽と相成り候間、また明年の暮れは如何様に成り行き申すべきかお楽しみ下されたく願ひ上げ候。

この手紙は、到着後三ヶ月経った十月二日に、秋月が国元の母や弟宛に書いたものであるが、彼らが高須に着いてから、生活が落ち着くまでの様子がよく分かる。(秋月次三編『秋月胤永 謹慎中ノ消息』。なお引用本文は、現代仮名遣いになおした。以下同じ。)

七月五日、秋月悌次郎・手代木直右衛門は、高須に着いた。十三泊十四日の旅である。高須では、藩主の兄弟を支えた忠臣として高く評価され、容保の母善孝院、定敬(旧桑名藩主)の母宮崎に手厚くもてなされる。藩主松平範次郎(容保の同母弟)からもねぎらいの言葉と共に菓子などが届けられた。(義勇は病弱の故をもつて、七月二十七日隠居し、養子の義生が家督を相続している。)

彼等が置かれた住まいは、会津若松の士中屋敷相当、玄関には足輕一人、買い物などする夫婦者がおり、中間が毎日三人交代で詰め、畑作水汲みなどに当たる。賄い役、あるいはその下役が日々見廻りに来る。時々若年寄の荒川官三、あるいは公用人達が夜にやってきて酒を飲んだりする。藩中には知人も出来て、贈り物をもらったり、詩歌の贈答をしたり、昨年暮れの牢獄住まいと比べるとまるで雲泥の差、人々からは忠臣だ、義士だと褒められて、揮毫を頼まれる。「不孝の浦島次郎ひよつとは忠臣孝子かと思ひ候程の事」、浦島太郎ならぬ浦島次郎とは、自分の名前に掛けて言っているのだが、明年の暮れには

またどうなっていることやらの偽らざる心情であろう。遠流永禁錮という罪は、閉門謹慎を、他家で受けるに等しい。配流先では厳しい監視の目にさらされることになるはずだった。ところが先にも見たように容保と高須松平家との関係から、彼らの取り扱いが懇切でないをさわめた。

国政の中枢にあつて藩公を補佐し、一橋慶喜、松平容保、松平定敬が幕政を左右した俗に一、会、桑体制と言われる強固なシステムの運用に関わり、戦争に突入するや軍事奉行添役、幌役として実戦に従事すると共に対外交渉役として前面に立つて行動した時代とは一転、敗者として裁きを受けた今では、ひたすら謹慎する以外にすることはない。もとより公的な配流だから生活費の苦勞は全くない。衣食は保障されている。武芸の稽古と読書以外にすることはない境遇は、書生時代に戻ったようなものである。大半の旧会津藩士たちが、失職してその日の暮らしにも困る状態に陥っていた中で、非常に恵まれていたと云えるだろう。手代木が書の手ほどきを受け、秋月に触発されて和歌を習い始めたように、秋月はここではじめて自分の本領を発揮することが出来るようになった。

手紙はさらに続く。

日夜の間、暇にまかせ修行仕直しの心得にて、学問、手習いのみ仕り居り候。浦島次郎万一同出で候わば、今度人らしく成りて御目に懸かりたしと祈るばかりに御座候。この程おいおい寒さに成り、近く綿入れ一つ、同じく綿の羽織一つ、足袋、帯等下し置かれ、また善孝院様どうぶく綿入れ一つ、手拭い品々下され、何不自由なく暖かに過ごされ候処、この方風説には、奥州など凶作など申し候間、如何様なる都合に御座候か、お召し物始め例の夜々の御酒は不自由も入らせられず候かとお案じ申し上候。

「暇にまかせ修行仕直しの心得にて、学問、手習いのみ」している

という手紙のことは見れば、おおよその様子が分かる。自分は、冬服も支給されて暖かに過ごしているが、奥州凶作との風聞があり心配していると、思ひは故郷に残した家族の身に及ぶ。中でも心配なのが母親のこと、衣服は勿論晩酌の酒に不自由してはいないかというのである。この後、姉二人、義姉、弟、妻への言葉が続く。特に第三郎には、母をはじめ姉二人、兄嫁とその子供たちなどの身の振り方をあれこれ注意している。最後に妻美栄に対しては、

一、お美栄へ。御姉様方へ力を合わせ、おなか様御孝養第一、自分代理までお世話申し上げ呉れ候。次に浩次をよくそだて、浩之丞かたうでも相成り候様、おいおい人心づき七つ八つにも成り候て、手習い、書き物致させ候事肝要なり。

と、自分の代わりに母親の世話をして欲しいといい、昨年冬、彼が猪苗代を出発した直後に生まれた浩次について、将来はしっかり学問をさせるようにと数年先のことで細々と書き送っている。そうして最後に、

一、書状差し上げ候はごく内密の事に御座候間、外々へお咄しは御無用に御座候。またこのお返事下され候にも及び申さず候。

内々の手紙なので他人には口外するな、返事無用と結んでいる。流刑地から、何らかのつてを頼りに手紙のやりとりをしていることが分かる。

三

手紙の文中、高須藩士の訪問を受けたり、詩歌の贈答をしたりという一節があった。藩政に関与していたときには、私的な感情を吐露する場面はほとんどなかった。それが、敗戦、捕虜になるという境遇の激変によって、奥平謙輔への答書、北越潜行詩など、一気に生来の才能が発揮されることになった。

『草軒遺稿』は、彼の没後学統を嗣いだ秋月胤継が編纂したもので

あるが、そこに収められている詩文の三分の一近くが、高須で製作されている。高須における暮らしが、彼の文人としての才能を十分に発揮させることになったといえよう。

高須に着くと同時に作ったのが、高須藩の参政荒川満忠に贈った、感謝の詩である。

七月余与手代木勝任錮於美濃高須藩。藩吏遇余輩懇篤無比。乃賦贈参事荒川満忠。以謝其厚意云。

七月、私と手代木勝任は美濃高須藩に禁錮された。藩の役人は、私たちを非常のていねいに処遇した。そこで、参事の荒川満忠に賦を贈り、その厚意を謝した。

高須之郷骨可埋。高須の郷に、骨を埋めることにしよう。

士人惇篤風俗佳。士人は、情に厚く風俗もよい。

岐蘇之水纓可濯。木曾川の水は、冠の紐を洗うのに適している。

蘇水溶溶秀蘇嶽。流れはようよう、木曾の山並みは美しい。

天恩洪大難為量。天皇の恵みは洪大ではかりがたい。

俯仰感慨何以償。省みれば涙が流れる。どう償えばよいのだろう。

臣罪大兮臣罰小。私は大罪人だが、刑罰は軽かった。

尚保余生在閑郷。生きることを許されて、静かな地に流された。

嘗期遠遊不家食。その昔、遊学して家には居なかった。

訪路伊洛迷荆棘。程朱の学を学んでいばらの道に迷い込んだ。

学而未成志已違。学びを全うできないうちに、万事志と違った。

默数往時転悽惻。だまって昔を数えあげれば悲しみは勝るばかり。

り。

重尋旧路仰愈高。改めて昔の道を探ねると、高く仰ぎ見なければならぬ。

腐鱗敗甲苦登陟。死屍累々の中敗残の身で、登りつめるのはむ

つかしい。

此際閑福足読書。

この際、閑かな幸せは読書出来ること。

自憐暮年志未息。

老境に至っても志はまだ残っているのがつらい。

嗚呼刑余復何求。

ああ、自分は受刑者だ。刑後、何も求めている。

不堪恩遇礼待優。

礼遇されている身で、感謝に堪えない。

有酒有肴亦忘苦。

酒も肴もある、苦を忘れてしまう。

栽花灌水意悠悠。

花を切り、水をやり、気持ちがちが落ち着く。

法裏伸情真循吏。

法規を守りながら真心を込める、それこそ、熱意ある官吏だ。

法不屈兮情不流。

法に屈せず、情にも流されない。

此言雖小可譬大。

言葉は小さいことだが中身は大きい。

推之可以治六洲。

この気持ちで、国全体を治めるべきだ。

且外形体且忘己。

形を外れ、己を忘れる。

百年訂盟君許不。

長い関係を結ぶことを君は許すか。

「骨可埋」ということは、自分が置かれた永禁錮という状態について、浮かんでくるさまざまな思いを受けて出てきた。運命を否定的に受け入れるにしろ肯定的に受け入れるにしろ、この地で生を了えることを決意した時、考えなければならないことは、快適に過ごせるかどうかということである。自分の置かれた立場を理解した上で気心の知れた仲間としてのつきあいをしてくれるかどうか、彼は自分のこれまでの歩みを振り返り、心を開いて彼を受け入れてくれるかどうかと問いかける。結びのことは彼のそうした思いが込められている。

この詩に続いて

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

曩賦長古一篇。贈荒川参政。以答礼待之盛意。河原詞宗与黒川高木二君次其韻。歎待慰藉之情見于詞。余受而誦之。有不堪感喜者。

乃更疊前韻以贈詞宗。兼謝黒高二契。諸契文辭富贍。才華奔放。

余則腹枵筆洪。猶兼葭倚玉樹。九月某日。

先に長編の古詩一篇を、荒川参政に贈った。待遇のすばらしさに答礼したのである。河原詞宗とともに、黒川、高木の二君が、その韻を次いだ。

歎待慰藉の心情がよく表れている。私はこれを受けてこれを朗誦して、

歎喜に耐えなかった。そこでさらに前韻を踏まえて詩を作って河原詞宗

に贈ると同時に、黒川、高木二人の心友に、謝意を表した。諸氏の文辞

は豊富で、才華が溢れているのに、私はというと中身は空っぽで、筆は

洩りがちだ。言ってみれば、ヨシやアシが、美しいエンジュの木と並ん

でいるようなものだ。

九月某日

という詞書のある長詩が続く。

四

荒川は、秋月の詩を河原、黒川、高木の三氏に見せた。河原丈平は、

先に述べたように江戸で小倉藩邸へ秋月を引き取りにいった高須藩士

で、秋月が江戸で修業中交流があった。黒川は黒川三畏、天保三年（一

八三二）生まれ、後に高須藩の記録『高藩紀事』を著した学者であり、

高木は、号竹軒、天保三年生まれ、槍術風伝流の長谷川惣蔵（敬）か

ら免許皆伝を受けている。しばしば江戸上屋敷に赴いており、在留中

に大沼枕山の門下生となり、枕山から高く評価された著名な学者であ

り詩人である。小藩ながら高須藩には江戸でも名を知られた武芸者文

人がたくさん居た。

秋月の先の詩に次韻（他人の詩の韻字と同じ韻字を用いて作詩する

こと。）された詩を読んだ秋月は、彼らが自分を喜んで受け入れ、慰

めの気持ちに溢れていることを知って嬉しくなった。高須藩の文人た

ちとの交流がこうして始まった。作詩の日付けは「九月某日」とある

が、この後九月十三日の述懐詩が置かれているから、それ以前に作ら

れたものである。七月初めに到着して以来、作詩のやりとりが速いピッチで行われていることは注目されてよい。これまで押さえ込まれていた個人的な感情を、自由に表現できる場、高須ではそういう人間関係が出来上がったことが分かる。

果是此郷骨可埋。
唱和篇詞藻佳。
詩情麗婉春柳濯。

やはりこの里に骨を埋めることとしよう。
唱和された詩の表現はすばらしい。
詩情はたおやかで美しく、春の柳が揺れるようだ。

健筆縦横聳山嶽。
得此瓊玉喜無量。
愧吾竟無木李償。
且倒一瓶何限興。
誦之誦之在醉郷。
移菊栽柑或忘食。
数弓隙地荊荊棘。
有時読書又賦詩。
浩浩之氣未曾息。
紅白菊香傲霜姿。
月旦為評黜又陟。
花事詩債事亦多。
幽居且忘我心惻。
同在都門道是求。
是昔太平德沢優。
寒盟謝君戰余遇。
同社亦共慰悠悠。
得隴望蜀君相托。

縦横の表現力は、山が聳えるようだ。
この詩を得て、感無量だ。
情けないことに私にはその才能がない。
酒を飲んで憂さを晴らす。
詩を吟唱するにつれて酔いが回る。
菊の植え換え、ミカンの栽培に夢中になる。
空き地のいばらなどを刈り取り、
時には読書し、詩を賦す。
浩然の気はまだおさまらず、
紅白の菊の香は霜に負けず、
批評し選択し、
花にも詩にも仕事は多い。
閑居してしばらく忘我の心境だ。
都にあつて共に道を求めて学んだ。
これは昔の太平の徳のたまものだ。
小さなつながりだが戦後の処遇に感謝したい。
またともに仲間としてゆうゆうと慰め合う。
隴を得て蜀を望むという諺があるが、もう一つお願いがある。

蘇生倘浴恩波流。
但願共駕蒸氣艦。
要窺亞欧二大洲。
男兒在世豈徒死。

生きながらえて、もし許されることがあれば、
お互いに蒸気船に乗って、
アジア、ヨーロッパをしっかりと見てきたい。
男として生まれたのだから、無駄死にはしたくない。

波濤万里君儔不。
波濤万里をこえて、君はともに行って下さるか。

彼の思いに応えた高須の人たちの表現力に感動し、敗者である自分に許された現在の境遇をよしとしながら、赦されたら彼らと共にしたいこと、それは蒸気船に乗って世界の状況を見て回ることだ、と話題は一気に現実をこえる。これは悌次郎が心の奥底に秘めて誰にも語らなかったことだった。

攘夷論者である孝明天皇の信任が厚かったが、松平容保以下会津藩は紛れもない開国論に立脚していた。先代容敬も容保も井伊直弼の条約促進に協力していた。水戸家の流れを汲む容保の尊皇の念は揺るぎないものであったが、その上での佐幕開国こそ会津藩の目指したことである。悌次郎にとつて、海外事情とは、国の発展のために知るべきことであり、取り入れるべきことでもあった。すでに、戊午の密勅問題解決のため水戸に派遣されて事態收拾をはかった後、世話になった岡谷鉏吾に対して、「外国軍艦の領土侵害という現実（ロシア軍艦が対馬に駐留したこと）に、断固とした態度をとるには、攘夷ではなく開国して西欧文物を取り入れなければ対等に渡り合えない。」（岡谷鉏吾宛て秋月悌次郎、外島機兵衛連名書簡）と断言している。だからこそ会津藩は長州藩の過激な尊皇攘夷に激しく敵対したのである。

唐突に見えるこの詩句も、彼のこうした指向の背景を知れば、納得出来る。これまでの自分の立場が全否定された現在、再出発するためには海外事情の吸収かどうしても必要だった。赦されたら外遊したい。

いっしょに行って下さるかという結びのことが、彼の切実な思いを表している。(明治十八年、次男の浩次がアメリカに留学して父の夢をかなえた。)

五

秋月と手代木は、高須の囚居で九月十三日を迎えた。一年前は、戊辰戦争のまつただ中、おりからの大雨で予定された朝廷軍の総攻撃が翌日に延期された日である。鶴ヶ城は攻撃軍に包囲されており城中は緊迫感に包まれていた。一年前とは打って変わった静かな月の夜、秋月は、上杉謙信が歌った「九月十三夜」を念頭に、

十三夜在高須。賦示同囚。

去年今夜在囀中。 去年の今夜囀中にあり。

何料今年此地同。 何ぞはからん、今年この地に同じくあらんとは。

酌酒共談防戦苦。 酒を酌みて共に談ず、防戦の苦。

月明過雁憶英雄。 月明過雁、英雄を憶う。

と詠んだ。この詩を見せられた手代木は、和歌で、

月見つつ去年の今宵をおもひ出る ところに響く玉ひきのおと

ながらへて今宵の月を今茲に 君と見んとは思はざりしを

と応じた。『韋軒遺稿』には、「十三夜在高須。賦示同囚。」としか書いてないが、『勝任歌集』には、「九月十三日秋月胤永が「去年今夜在城中。何料今年此地同。酌酒共談防戦苦。月明過雁憶英雄。」といへるから歌を作りて見せけるに同じ心をよめる」とあって、この時の唱和の様子が知られる。

秋月の詩は、天正五年九月十三日、畠山氏との合戦に出陣した上杉謙信が、畠山氏の拠る能登七尾城を攻撃し、勝利を目前にして賦した陣中作、「九月十三夜」を念頭に置いた作であるが、流刑地で見る十三夜の月に、戦勝を高らかに歌った謙信をおもい、敗残虜囚の身を嘆く秋月の詩に対して、和歌二首で唱和した勝任、京都の政変に始まる

戦いの日々、その最前線にあった二人が、虜囚として今、明月のもとで一年前を回顧している。彼らにとって過去はそのまま現在の境遇につながっているのだ。詩に込められた万感の思いが読み手の心を打つ。勝任が見せられた詩の初句は「在城中」とあったが『韋軒遺稿』では「在囀中」となっている。情景表現としては、「囀中」の方が「城中」より緊迫感が強いといえようか。囚人としての日常の中で、秋月の「から歌」に対して和歌でこたえる手代木、琵琶か琴か、月下に流れる音楽を聴きつつ、激動のさなかにあった一年前を回顧する、素直な読みぶりの中に、体験を共有するもの同士の無限の思いが表現されている。

明治十年出版された『旧雨詩鈔』には、この詩が「己巳十三夜似手代木勝任」という題で収録されている。戊辰戦争で朝廷軍に包囲された若松城の思い出は格別だったようで、秋月は、この後、乙亥(明治八)年故郷で北海道から会津へ戻ってきた宗川老人と会った時、熊本にいた庚寅(明治二十三)年にも作詩している。熊本での作を以下に掲げておく。

砲声轟地立更闌。 砲声地に轟き、更闌けて立つ。

死守豈期他日安。 死守して、豈他日の安きを期せん。

逝者不帰今夜月。 逝く者は帰らず、今夜の月。

鎮西独拳酒杯看。 鎮西、独り酒杯を挙げて看る。

ちなみに、上杉謙信の「九月十三夜」は次のようである。

霜満軍営秋気清。 霜は軍営に満ちて秋気清し。

数行過雁月三更。 数行の過雁月三更。

越山併得能州景。 越山併せ得たり能州の景。

遮莫家郷憶遠征。 さもあらばあれ家郷の遠征を憶うを。

六

ある日、上田氏貞(結城)と名乗る高須藩士が、囚居にやってきた。彼は文政十二年生まれで四十五歳、藩の槍術指南をしていた。戊辰戦

争の実態が知りたい。旧来の武芸、特に槍は実戦で役に立ったかどうか聞きたいのである。

徳川幕府の成立以来、天草の乱を除いて、日本では太平の世が続いた。幕末になって世界の潮流に気づいた幕府以下各藩は、従来の武士団体制の中に、新しく洋式の軍事体制を取り入れた。そして迎えた久方ぶりの実戦、ふだんの訓練が実戦に役立つかどうか、これは戦いの根本命題である。高須藩も、東征軍には尾張藩と共に兵員を派遣していたが、北越の実戦についての情報は乏しかった。そこに、会津籠城戦の中心人物が配流されてきたのである。地元の武術家達にとつて、太平の夢を破った実戦の情報は、どうしても聞いておきたい事柄だったに違いない。これにこたえて秋月が作ったのが、「鉄槍行」である。

（二〇一〇年「金城学院大学論集人文科学編」7-1「鉄槍行」——『韋軒遺稿』を読む（二）参照。）

「上田某に贈る 並びに序」には、

余、己巳の七月をもつて高須藩に囚となる。槍師上田某来たりて我に戊辰の戦略を問ひ、また槍隊の用舎得失を論ず。談極わめてころよし。よりて長句を作りもつて之に贈る。

という序文がある。「行」というのは、古詩の形式の一つで、比較的長編の詩をいう。『韋軒遺稿』には「行」が三編収録されているが、その内この詩と「夢貞行」の二編が高須で作られている。他の一編は明治十四年の作「鷹来行」であるが、この詩の序文には、戊辰の役当時、沢大孺は、衝鋒の長、自分は邸監兼幌役として共に越後に出陣し、後に若松城が包囲された時には、共に米沢に赴いたと記されており、越後戦線に秋月がいたことが分かる。

中国の三国時代魏の曹操は槊（音は、サク。長さ一丈八尺の大きなほこ）を携えて戦場を疾駆した。曹操幕下のあごひげを蓄えた猛将于將軍は、稍（音は、サク、槊と同字。長さ一丈八尺の大きなほこ）

の使い手として有名だった。唐を倒した後梁の武將王彦章は、大槍を手にして馬を疾駆させ、王鉄槍と恐れられた。

誰もが知っている曹操の故事から筆を進め、一転して日本の戦国時代末期に、豊臣秀吉の天下統一に貢献した賤ヶ岳の七本槍、武田信玄の滅びた後徳川家康に仕えた槍弾正こと保科正俊、（正俊の孫正光の後を継いだ正之は、二代將軍秀忠の庶子で、会津松平家の祖である。）その遺風を受け継いだ松平容保率いる槍部隊へと話をつなぐ。みことなレトリックである。

鉄砲隊と槍隊と、どちらに分があるか、そんなに簡単に優劣の判断はできないとして彼が取り上げたのが、戊辰戦争中の赤谷口の戦いと、中野竹子の奮戦とである。

弾を込める間もなく白兵戦になった赤谷口の現場の様子を証言するのは、攻撃した側の武將である。なぜこんな事が出来たのか。それはたまたま秋月が戦後、密命を受けて北越にいた長州藩士奥平謙輔を訪ねていたからである。

奥平は、赤谷口では、朝廷軍の先鋒隊が会津藩と戦って敗れ、その後長州藩が進撃して、「槍刀相接し、銃臂相打つ」白兵戦になり、結局長州藩は新発田に退いたと、会津藩の戦いぶりを称賛した。もう一人、高須梅三郎という長州藩士がいた。彼は槍の名手で、若松城攻撃の際、会津藩の槍部隊の技術が優れていて、わが藩兵は、進撃できなかった。会津藩は槍部隊をうまく働かせた、といっていた。

この証言の後秋月は話題を一変させる。中野竹子は、なぎなたの名手であった。彼女はりりしい出で立ちで出陣して戦死した。木曾義仲に従軍した巴御前に匹敵する戦士だ。竹子は、銃撃戦で死んだと言われているから、ここに取り上げる話題としては問題があると思われるが、そういう詮索をこえたところで、女性の奮戦記というだけで部外者にとっては非常に貴重な情報だったといえるだろう。秋月がこの時

例に挙げているところを見ても、戦争当時の会津藩の婦女隊については早い時期から高く評価されていたことが分かる。いずれにしても、この詩を受け取った上田結城にとっては、思いもよらない情報だったはずである。

ここで彼が語った事柄は、戦場における戦いの様子など、戦後一年足らずの時期の回想として興味深い、それと共に、槍という武器に対する考え方を含めて、「鉄槍行」は、秋月の時代認識を知る上でも貴重である。

こうした展開について『韋軒遺稿』には、友人の川田甕江が、詩文の途中に、

「本邦の故事を列挙す、斬新にして精彩あり、」

と感想を述べている。同じく豊島洞斎は、

「槍の功、実績を枚挙し、歴史として見るべし、近時日露の戦の如き、露軍に唯コサック槍兵あり、少しく我が突撃隊を支う、槍の功はあに廃すべけんや、子錫にしてなお存せば、これを見て、必ずや諸証件の中に入れん、惜しきかな、見るに及ばずして 歿するなり、」

と日露戦争当時のコサック槍騎兵の例を挙げ、子錫（韋軒の雅号）が生きていたら、これをきつと証明材料の一つとするはずだ、というのである。

南摩羽峯は、

「実事を挙げて証と為す、妙なり、」

という。

さらに、娘子軍の項について川田甕江は、

「娘子軍を挿入す、何らの妙筆、」

とその文章展開の見事さを称賛、中村敬宇も、

「雄健にして痛快、刀槍のために冤を伸ぶ、今の世少なかるべからざるの詩なり、」

と刀や槍が今の時代少し疎んじられているのを跳ね返し、武人のため意気込みを見せており、大きな意味があるといい、さらに結論に付けても

「一結力あり、」

といい、南摩羽峯も、

「結、精確を得、」

と絶賛する。

幕末の諸藩で急速に普及した洋式調練と鉄砲隊の成果がこの戦争ではどのように表れたか、誰もが知りたかった問題点について、折衷的なまとめになっている。

この時同席していた手代木勝任は、短冊に、次のように記した。

上田氏貞が 軍ゐひぶりも昔にはかはりて砲戦を専らにすなれば 槍はすたれなんなどいふ うけられねば 去年のいくさのさまをも細やかになど聞えければ よめる

世の中はなべてすつとも捨てめやは

わがとき馴れしたまほこの道

世間では、戦争では槍の出番がなくなるといつているようだが納得出来ないという上田に対して、手代木は、自分は決して古来の武道を捨てはしないと答えている。時代の転換期の雰囲気がよく分かる。

七

この囚居にはいろいろな人物が訪れている。十二月一日には、高須藩士古田迪庵がやってきた。彼は寛政五年（一七九三）馬廻りに召し出されて以後小姓、奥御番、使い番、目付、物頭格を歴任した高須藩の重鎮の一人で、松平義建の次男秀之助（後の徳川慶勝）の守り役を務めたこともある。江戸の書家市河米庵門下で書に秀で、このころは高須藩主義生の書道指南役をしていた。「慶勝公履歴附録」には、「この人沈黙にて書画篆刻等の技芸あり。忠実無二にして能く公の心を得た

り。」とある。手代木も高須に来てから彼に書を習っている。やってきた彼に、秋月は即席の詩を贈った。

高須に来たことで一気に展開された詩作の中で注目されるのが、河原湊南、高木竹軒との贈答である。

秋月は歳暮自分の現在の境遇をもとに、維新後の世相の悪化を嘆いて、皇基の確立を願う思いをうたった詩を河原湊南に贈った。その詩はまだ会ったことのない高木竹軒の目に触れた。竹軒への次韻、湊南への三疊韻、以下竹軒へ六疊韻まで、詩戦が続く。純粹に文雅の世界に没入してこの年は暮れた。

後年秋月胤継からおくられてきた『韋軒遺稿』を読んで高木竹軒は、

今を距つ実に四十五年、今や亡し、我独り存す。

もう四十五年も前のことだ。彼はなくなり、私はまだ生きている。

と深い感慨を催し、

像影儼然として真に生くるに似たり。香を机上に焚いて笑いてあい迎う。

令名不朽、世長く仰ぐ。佳句久しく留まり、人しばしば驚く。（下略）

肖像はどつしり落ちていた生前の彼そのまま、香を焚いて、笑顔で彼と向き合う。

と、巻頭の肖像に往時を偲んでいる。

八 秋月と手代木は、穏やかな気持ちで明治三年を迎えた。年が変わっても、囚居への来客は絶えなかった。

しかし、この間に新政府は政治体制の根幹に関わる新政策を押し進めていた。前年十一月三日、松平容大に家名存続が許され、猪苗代近辺三万石と斗南三万石のいずれかを選択せよといわれた。この件は結

局、山川浩など旧藩役職者協議の結果斗南ときまり、藩士家族の大移動が始まった。全藩流罪とよくいわれるが、旧藩重役が選んだ道だった。会津藩領は幕府の預かり地をくわえて二十八万石の大藩だったが、斗南藩は三万石で、所領が一気に減少したため、移住に際してして苦労が絶えなかった。国元では、こうした動きに対応するため動揺が続いていた。

高須藩内でも、版籍奉還により、藩主は国から任命される形となり、藩主に仕えていた藩士の身分も、これまでとは変わっており、奉禄も変更されたため、徐々に生活の在り方が変わってきていた。秋月らの生活にもこの変化は影響してくることになる。

高須藩は、三万石の所領の内美濃国高須町を中心にこの地域一帯に一万五千石、信州伊那地方の天竜川沿いに一万五千石の所領があり、竹佐（現在の長野県飯田市竹佐）に代官所を置き、高須藩士が派遣されて一帯を治めていた。高須藩は石高三万石という小藩だったが、尾張藩の親藩として格式が高く大名同士のつきあいでは格式を重んじるため、不相応の費用を支出する必要があり、財政逼迫で苛酷な税金の取立をしなければならぬところだが、藩士は尾張藩からの付属が多く、毎年尾張藩から援助金や援助米が送られてきており、信州領では周辺の地域と比べて随分ゆとりだった税制であった。とはいえ定期的に交代で赴任してくる代官とその手代に、新規の施策により従来とは異なるルールを押しつけられても困る、そうした住民の知恵が働く余地が生まれるのは当然だろう。その辺りは、高須藩の問題案件だった。

九 一月のある日、新制度の下で高須藩樵小参事に任命されていた高須藩士森井直衛が秋月のもとを訪れた。彼は秋月と同じ四十七歳だった。信州の代官に任命されたが、今から気が重いという彼のことはを受けて秋月は、おもむろに地方を治める心構えを彼に説いて、一文を草し

た。それが、「送権少参事森井君赴信州竹佐序」である。「序」はこゝでは、送るに当たつてのことばの意。

送権少参事森井君赴信州竹佐序

虎之渡河越境。与蝗之不入界。其德能感物也。今雖有難治之國。豈有虫獸之如難感者哉。信之為州。山高而水駛。其人民慄悍而剛強。故控制得其道。可以使向善遷義。不然剛悍變為狂暴。或蜂屯蟻集。挾險為亂。結党抗官。仇視吏人。蓋亦不易治也。治之之要在簡其節目。薄其征入。以純信大義率之。高須藩別封實在信之中。明治三年正月命権少参事森井君往治之。君謹厚木訥人也。響聲來告曰。藩吏之至別封。土人送迎之勞贈饗之費已多矣。余不欲復更煩之也。余曰此即仁心也。有此心可以往也。苟推此心。何行而不成。凡今之吏於土者惟憂無此仁心而已。既無信義導之。又厚其稅苛其令。惟恐其送迎之不至贈饗之不厚。然而送迎之与贈饗依例猶之可也。求訴必以金。諮稟必以金。一舉事一上書非金不行。無事則造設事端使出金。多方求之。必得而後已。故民之於吏。不独仇視之。為虎狼。為鬼蜮。已無信義漸漬於其前。又有苛法厚稅以驅於其後。不負而何為。是豈独民之罪。余嘗舟自予州至備後。与安芸民同乘。問其稅法。曰。五公五民為定稅。然中間吏人因縁為奸。造設名目。至七公或八公。皆私利之。故諺曰。七八以為鬼面。国音面与免通免稅也畏而惡之甚。孔子曰。苛政猛於虎。其不然乎。昔之治民者能感猛獸。今乃為民所虎狼視。抑亦異矣。而吏人之得怨於民者不独芸也。夫君之愛民如赤子。民之戴君如父母。而君之在上。任其二三重臣。垂拱以受其成而已。又其所自奉。衣食有常品。器物有定数。事依其例。如此者雖不足称明主。豈為失君道哉。民之事上。有出粟米者。有作器皿者。有通貨財者。不在野則必在市。未嘗有不事其事者也。如此而叛乱相踵者。其責盡有所歸焉。夫臣者行君之令而致之民者也。今無乃失其所以致之民乎。非其人而在其職。

乃所以失之也。郡官之与計吏。掌数之与治獄。皆不能得其人。是國之所以不治也。是臣不惟得怨於民。亦得罪於君也。客歲信尾与濃勢。土民囂聚。挾險為亂。結党抗官。藩之与県往往被其災。独高須藩与其別封。封境犬牙接其間。而其人民怙然不動者。是其德政入民心之明驗。而吏人之得罪於上下亦可以知也。今知事公慈仁天縱。子養人民。不論農商。惟才之用。君能体其仁心。発諸事施諸民。誰不喜躍而感奮。復何難治之有。所謂行君之令而致之民者。於是乎在焉。不惟使其人民遷義向善。純忠信真奇傑者亦出。苟国家有事。投水火将惟命之隨。況財貨之在民者。不徵亦将自獻。而況租稅乎。何叛乱不服之有。君已有此仁心。充而拔之。勉而不倦。則至隣封近県。亦将服而化之。虎之越境。蝗之不入。亦此之推也。復何足怪。如聞信之別封。地広而山深。必有遺利。種樹之与蚕桑。作器皿与為貿易。皆商推而料理之。授之方法。又可以富也。如是則送迎贈饗何足言乎。乃将借寇君不帰。雖然。小民不知道。子産之始相鄭也。曰。誰殺子産。吾其与之。既而喜其政曰。子産死。誰其繼之。民固有不可謀其始者。故或子視而長養之。或草薙而禽狝之。不可執一而論。豈独以寬為得乎哉。梁馮道根為人謹厚。為政清簡。其為刺史。吏民皆懷之。梁主嘗嘆曰。道根所在。令朝廷不復憶有一州。方今使高須知事公不憶有竹佐者。其在此人乎。其在此人乎。

虎が河を涉るときには、イナゴは共にそこには行かない。虎の威を感じているからだ。治めがたい国があるとしても、虫や獣のように、何か感じるころがあるはずだ。

信州という国は、山が高く水は早い。人民は慄悍で剛強だ。押さえずけずに政道を行い、善や義に導くのが良い。そうしないと、剛悍は、兇暴に変わってしまう。ありのように群らがり、険しいところに隠れて反乱を起こす。不平分子が党を作つて官に反抗し、役人を仇敵のように思う。

治政の要点は、節目を簡単にして筋を通すこと、圧迫せず無理をしないこと、その結果、純信の大義で人民を統率することが出来る。

高須藩の別封（飛び領地）が、実は信州にある。明治三年正月、権少参事森井君が代官に任命された。森井君は、温厚で慎み深く、飾らない人である。彼は私の所に来て、眉をひそめていった。

藩の役人が別封に行くと、住民たちは役人の送迎に宴会をしたり贈り物をしたり、余分な費用が多い。自分はそういうわずらわしいことは望まないと。私は言いたい。

それこそ、仁の心だ。その心がけで行けばよい。この気持ち忘れなかつたらうまくいかないわけがない。大体、現今の役人には、住民に対する仁の心がないのが気がかりだ。

信義がないのに住民を指導し、増税をすれば、住民は、送迎の時のもてなし、付け届けが十分でなかったからではないかと思うに違いない。送迎の贈り物ぐらいいまだいい。役人は、訴えには金、何かを發議するにも金、何かという金を要求し、金がなければうごいてくれない。無事と思えば全てに金がある。だから住民は、役人を仇敵のように思うばかりか、虎や狼のように思い、鬼蜮（いさごむし、害虫）と思っている。

信義がないため、その前にくずれ、苛法、重税が追つかけてくるのを、負担にならないようにする。これは住民の罪とはいえない。

私はかつて伊予から備後に舟で向かったことがある。その時、安芸の住民といっしょになった。安芸国の税制を聞いたところ、彼が言うには、定率は五公五民だが、中間にいる役人達が、何かと理由を付けて税金を取り立てるので、けっきょく七公から八公になる。皆私利だ。だから諺に、七八取られるのを鬼面といっている。面と免と発音が同じで、鬼のような税金というわけだ。おそれて憎むこと甚だしい。孔子も言っている。「苛政は虎より恐ろしい」と。そのとおりだ。

昔の民を治める者は、猛獸をおそれたが、今は人民が官を虎狼視する。大

変な違いだ。役人が人民から恨まれているのは、安芸国ばかりではない。

君主は人民を赤子のように愛する。人民は国主を父母のようにいただく。上に立つ国主は、数名の重臣に命じて、思うようにさせてその成果を受けるだけだ。また、自ら奉ずるところ、衣食が備わり、器物も十分で先例通りにしているならば、明君とは言われないまでも君主としての道を踏み外してはいない。

人民が上に仕えること、米などの穀物を出す者あり、器を作る者あり、貨財を通ずる者あり、野にあらざればかならず市にいる。いまだかつて仕えていないものはない。これが仕えるということだ。そのようにしていて反乱が相次いで起きたら、その責任がどこにあるかははっきりしている。

臣たるものは、主君の命令を体して人民に向き合う者だ。それがまま人民に向き合えば、その職にいてはならない人だ。すなわち失職することになる。郡官と収支を掌る役人、教育を掌る者と治獄の役人、いずれもその人を得ることが出来なければ、国が治まらないわけだ。これは、臣が、人民から恨みを買うということを思わないからだ。だから主君からも罰せられる。

以前信州、尾張、美濃の人民が、徒党を組んで集まり、険しい場所を拠点にして争乱を起こした。藩、或いは県は襲われて往往その影響を受けた。ただ高須藩とその信州領は、国境が相接しているのに全くその影響を受けなかった。これは、徳政が住民に行きわたっているからだ。役人が、上にも下にも罪がないということ知るべきだ。知事公の慈仁は、天の教えにかなっている。

人材を育て拔擢するのに、農商を問題にせず才能のみを評価する。国主は、仁心にのっとって諸事を行い、民政を行うならば、誰もが喜び感奮する。決して治めたいことはない。主君の令を実行して人民に施すとはこういうことだ。無意識のうちに人民を義にうつし善に向かわせると、純忠信真の傑物が出る。国家有事の際、水火に身を投じて命に従う。人民に財貨の蓄えがあれば、徴税しなくても献上してくる。税金などきちんと納める。反乱を起こそうとはしない。

主君はこのような仁心があり、満たしてこれにより、勉めて倦まない。県境を越えてその徳が行きわたる。虎が入境したとき、イナゴは入らない、これと同じだ。

少しも不思議ではない。

聞くとところでは、信州の高須藩領は、土地は広大で、山が深い。かならず知られていない利点がある。木を植え、養蚕をし、器を作って、交易をする。商いに当たり、これをさばく。そういう方策を授ければ、豊かになる。送迎時の贈饗など、問題にしくなくてよくなる。留任を希望して君を帰そうとはしない。

そうはいっても庶民は道を知らない。成文法を作った鄭の子産は、始め鄭の宰相になったとき、庶民は誰か子産を殺すか、自分はこれに与するといった。ところが何時かその政を喜んで、子産が死んだら、誰が跡を継ぐのかと心配された。民衆はもとよりそのはじめをはかることが出来ない。だからあるいは子を育てるように、長く養う。あるいは草を刈ってこれを禽獣する、同一に論じてはいけない。ゆるやかにすればよいというものでもない。

梁の馮道根は人となり謹厚で、政をなすや、清にして簡、刺史になると、吏民は皆これに懐いた。領主は嘗て道根の統治のあり方に感嘆した。「今朝廷は、また一州あることを憶わない、(彼の治めているところでは、全く何も問題が起らない、)」と。

まさに今高須の知事公をして、竹佐のことを憶わないで居られるようにする、それ、この人がいるじゃないか。

十

長文の引用になったが、以下に大意をまとめておく。

山国の住民は、しぶとい強さを持っている。押さえることなく導くべきだ。

森井君は、温厚で慎み深く、飾らない人である。代官が赴任すると饗応、贈答などがある、うつつうしい限りという。

その気持が仁だ。仁の心があれば、指導課税もうまくゆく。なぜ饗応、贈答するか。役人が何かという金を求めるのを押さえるためだ。これは住民の罪とはいえない。

諸国漫遊中聞いたが、安芸の税率は定率五公五民だが、中間の役人がさらに私利を貪り、七公、八公になる。鬼面といっておそれ憎むこと甚だしい。

国主は、民を愛し、政治は部下に任せる。人民は父母のように国主を敬愛する。衣食が備わり先例通りにしていれば明君と言われないまでも道を踏み外すことはない。

人民はそれぞれの職業で、国に仕えている。反乱が起きるといことは、彼らの仕事があまくいつていないからだ。

臣下は主君の命を受けて人民と向き合う。まともに仕事が出来ない者は失格だ。役人がそれぞれの持ち場で勝手なことをすれば人民から恨みを買ひ、主君からも罰せられる。

信濃、尾張、美濃地方で人民の反乱が起きたが、高須藩とその信州領だけは影響を受けなかった。知事が仁で政治を行い、役人が公正だからだ。

人材を抜擢し、国主は仁心につとめる。そうなれば人民はついてくる。無意識のうちの人民を義にうつし善に向かわせると、すばらしい人材が育つ。蓄えがあれば、一旦有事の際、反乱が起きることはない。信州の高須藩領は広大で山深いとか。新しく産業を振興することが出来るはずだ。そうすれば送り出そうというのではなく、留任希望があるだろう。

春秋時代、孔子が敬愛した鄭の子産は、初めて成文法を作ったが、当初は受け入れられなかった。ところが亡くなると皆がその善政を惜しんだ。梁の馮道根は、まじめで、さっぱりした人物で、彼が治めると全く問題が起きないので国王は、その無風を感嘆した。

竹佐で、子産や馮道根のような治政をする、君が行けば竹佐はおさまる。

文中にあるように、森井が悩んだのは、赴任先での地元民の対応である。一般的に藩の役人が信州に行くと、住民たちは役人の送迎に宴会をしたり贈り物をしたり、余分な費用の負担をしている。自分はそのいうわずらわしいことは望まないというのに対して、秋月はどう答えたか。彼らがもてなしたり、贈り物をしたりするのは、今以上に重い負担をかけられないようにという思いからだ、そこをところはつきりさせれば問題は解決する。一言で言うところになるのだが、諸国漫遊中の見聞、引用されている中国の故事など、実例を挙げて説明している。

儒教の教えに基づく治政論として、安芸の鬼面税制を例にあげながら、代官としての心構えを説く秋月の口調はさわやかである。会津藩ではこういう具体的な治民政策に関わることがなかったから、彼にとっては珍しい口調の文章になっている。時代性を感じる論調ではあるが、彼の政治にたいする姿勢を知ることができる。

十一

もともと高須藩の税制はゆるやかで、近隣住民がうらやましく思っていた。だが、藩庁から遠く離れた代官所では、代官や手代が小細工をするトラブルがしょっちゅうあったのだろう。これより二十年くらい前には、代官の手代親子が、賄賂を要求し、手心を加えるので、二度と信州に来させないようにしてほしいと、支配下にあった村々四十六カ村の庄屋たちが連名で、代官所に願い出るといふ大事件が起きていた。

秋月が事情を知っていたのかどうかは分からないが、まさに秋月が言っているような現実があったのである。森井が赴任してから程無い七月十四日、廃藩置県が実行されると、高須藩では、これまで尾張藩

からの援助金穀があつて藩政が維持されてきたが、それがなければ独立した県政は出来ないとして、名古屋県（維新後の尾張藩）との合併を願い出て許可された。竹佐代官所は名古屋県竹佐出張所となる。森井は代官所廃止の責任者として、土地建物、資産の処分にあたり、最終的に残った三千両あまりを、身分に応じて住民全員に分配した。その後名古屋県の信州分は、筑摩県に統合されることになった。

明治五年一月、森井は次のような布告を出した。

こもと管下の義、かねて申し達し候通り、新県へ引き渡すについては、銘々心得はこれ有るべく候へども、なおさら農事勉強いたし遊惰、不心得の義、これ無きよう篤と心掛くべく候。もし心得違いの者これ有り候ては、第一当局不行き届きの節に相当たり候。右等の趣き、相弁えきつと心得べきものなり。

壬辰正月 名古屋県竹佐出張所

筑摩県に旧高須藩領を引き渡すについて、住民にまじめに働いてくれないとこれまでの自分たちに不行き届きがあつたことになるから、と説諭する姿勢は、秋月に言われた仁の施政を実践しようとした彼の最後のことばだった。（地域研究誌「伊那」一九五八年、「竹佐陣屋役人の引揚げ」一、二）

代官所閉鎖に当たつて剰余金を主家にも送らずもちろん自分も全く受け取らず、住民に分け与えた所置といい、この告示といい、赴任前に秋月のところに現れた時と全く変わらない、清廉潔白な森井の姿がほうふつと浮かび上がる。高須に戻った彼は、後、士族授産のため第七十六国立銀行の創設に関わるなど、さまざまな足跡を残した。

（この項続く）

二〇二〇年五月十八日